

五行の拳

学生編

東武瑛



五行の拳

東武瑛

「空手をやりたい」と小学生の頃から、思い続けていた平野賢己は大学に入学して念願かない拳法部に入部する。

厳しい稽古に耐えた平野は拳法部の主将になり、大学を卒業してからも空手を続け、勤務先で所属流派の空手部を設立していく。

目次

入部

拳立てから下段払い

初めての組手

念願かない

少林寺流

歓迎会

拳手法

面を付けての組手

宗家の息子

待ち突き

主将の組手

一人稽古

土の上で巻き藁突き

胆試しの名演技

闘わず勝利

全国大会

結果

主将との組手

学園祭

初段、黒帯に

スカウト

上級生になって

今年の一年生

一年生の組手稽古

空手部からの入部

石橋の組手

全国大会への特訓

組手試合開始

組手試合で△回戦進出

宮崎全国大会の終わり

恋愛

交流戦

遠藤の勝利

団体戦

朝倉の退部

年が明けて

演武会

橋本

後ろ廻し蹴り

梅雨が明けて

鹿兒島入り

一回戦

苦戦強いられた二回戦

四回戦

台湾の黄、旋風脚

決勝戦開始

勝利

入部

昭和の時代

春

広島

桜

修道大学

武道場

拳法部の看板の前に立つ学生

「すいません」

奥から空手着を着た男が玄関に出てきた。

「何の用だ」男が学生に聞くと「入部希望なん

ですけど」と学生は答えた。

「珍しい奴だ。自分から入部を希望してくる奴

は、お前が初めてだ。空手をやった事あるのか？」

「ありませんけど、見た事はあります」

「ふうん。でも見るのと、やるのでは大違いだ。

稽古は想像以上にキツイぞ」

「はい。頑張ります」

「よし。入部を許そう。お前の名前は？」

「はい。平野と言います」

「よし、平野。古い空手着があるから着替えて、早速、今日の稽古に参加しろ。中に入れ」

「わかりました。失礼します」

男は平野を連れて、武道場の中にいる空手着を着た男達の前で「コイツは平野と言う。自分から入部を志願してきた変わり者だ。皆、可愛がつてやれ」と言った。

皆が「平野。頑張れよ」と言い、歓迎した。

拳立てから下段払い

拳立てから下段払い

入部した初日から、平野は稽古に参加する事になった。

最初に会った主将から「お前以外の奴は全員、校門でスカウトした奴等」と聞かされた。

4、50人、新入生がいたが、殆ど、イヤイヤ入部させられた、と平野は感じた。

初めての組手

「さあ、稽古を始めるぞ」と主将が言い、皆、正坐し、黙想の後、立ち上がり、正面に礼し、お互いに礼し、稽古が始まった。

稽古は、いきなり、拳立て100回から始まった。

殆どの新入生は、10回で潰れた。

「こら、気合いを入れる」と先輩達が言い、新入生は力を振り絞り、拳立てを続けたが、また10回で潰れる者が殆どだった。

平野もキツイと思ったが、体力には自信があったので何とか続けた。

しかし、50回を超えると限界を感じ始めた。

「よし、そこまで止め」と主将が言った。

「平野。よく頑張ったな」主将は、そう言うのと立って四股立ちになれ」と新入部員に命じた。

新入部員は主将の四股立ちを真似て構えた。

「ケツが出てるぞ。引っ込めろ。もつと腰を落とせ」と主将は新入部員に言い、「よし、今から前蹴りの下段払いをやる。ちゃんと受けないと腹を蹴られるぞ」と言った。

主将は「前蹴りはこう蹴る。それを下段払いで、こう受ける」と言い、新入部員の前で実演した。

「さあ、並べ」と主将が言い、新入部員が一列に並ぶと前に先輩達が並んだ。

「よし、下段払い、始め」と主将が言うと先輩達は新入部員の腹に中段前蹴りを出した。

「ううっ」新入部員の一人が蹴りを受け損ない倒れた。

「タイミングを外すとああなる。先輩の蹴り脚に引っ掛けるよう払え」と主将は言った。

平野は何度か受け損なったが、持ち前の運動神経で、まともに受け損なう事は無かった。

しかし、殆どの新入部員は、先輩の蹴りを受け損ない、しゃがんでしまった。

「何だ、根性の無い奴等だな。よし、休憩だ、と言つても、次は組手をやる。面は付けなくて良から、胴とグローブを付けろ」主将がそう言うのと先輩達が防具を持ってきた。そして、新入部員

に胴を被せ、紐を結んだ。

「よし、これから組手をやる。顔面攻撃は禁止だが、ケンカと思ってやれ」主将がそう言う。先輩達と新入部員が一組になり、組手が始まった。

「平野。お前はオレが相手してやる。遠慮なくかかって来い」主将が言う。平野は「宜しくお願います」と言い、見よう見まねの蹴りをだした。

念願かない

組手稽古が始まると先輩は様々な蹴りを出し、新入部員を翻弄した。

半飛び足刀で蹴られ、壁に吹っ飛ぶ者。

回転後ろ蹴りを脇腹に入れられ悶絶する者。

前蹴りを出し、足指を先輩の裏拳で叩かれる者。

面を付けて無いのに廻し蹴りで顔面を蹴られる者。

殆どの新入部員は立っているのが、やっとの有り様だった。

平野は主将から「攻撃して来い」と言われ、蹴りを出したが、捌かれて当たらない。

廻し蹴りを出したら、足の甲を肘で叩かれてしまった。

「痛っ」と平野が言うと主将は「廻し蹴りのスピードが遅いし、引きが無い。廻し蹴りを出す時は注意しろ」と言った。

痛い思いをしたが、平野は楽しかった。

永年、他のスポーツをやりながら空手が出来る日を待っていた。

稽古はキツかったが、ようやく念願かない喜びと充実感を平野は感じていた。

少林寺流

「よし。組手稽古止め。防具を取って整列だ」主将が言うとダウンした新入部員の胴とグローブを先輩が外し、皆、立って整列した。

「これから基本をやる。新入部員は、先輩達の

真似をしてやれ」

「四股突き用意」主将が言う。先輩達は腰を落として四股立ちになった。

「何だ、ケツが出てるぞ。もっと膝を曲げろ」

新入部員はやっとの思いで立っていた。

「一、二、三、四」主将が突きの号令をかける。

新入部員の中に倒れる者もいた。

平野もくたくたになっていたが何とか立って、号令に合わせ、突きを出した。

「次は空間逆突き」主将の号令が続く。

その後、前蹴り、足刀の稽古をし、主将が「止め、その場に正坐」と言った。

主将は「俺達の流派は少林寺流だ。少林寺拳法とは違うぞ。もう一つの空手部の流派とも違う。基本も型も独特だが、約束組手も独特だ。だが、何と言っても、面と胴とグローブを付け、多彩な蹴り技や螺旋手刀と言った手技を思い切り、相手に当てるのが醍醐味だ」と言った。

「それでは、今日の稽古を終わる。歓迎会をやつてやるから、掃除をして着替えた後、皆、校門の前に集まれ」と主将が言い、新入部員は掃除を始

めた。

歓迎会

中華そばの暖簾

店内は拳法部の学生で満杯だった。

「よし、皆、席に着いたな。これから新入部員歓迎会を行う。新入部員は先輩のコップにビールを注げ」主将の声で新入部員は、ふらふらに成りながら、各自、先輩のコップにビールを注いだ。

平野は主将のコップにビールを注いだ。

「よし、乾杯だ」

主将が声高らかに言うと、皆、口を合わせ「乾杯」と発声した。

先輩達はビールを飲み干すと新入部員のコップに「さあ、遠慮しないで飲め」とビールを注いだ。新入部員は、喉がカラカラに乾いていたので皆、一気にビールを飲み干した。

ツマミのギョウザが運ばれて来ると先輩達は食

べながらビールを飲み、新入部員のコップにビールを注いだ。

「もつと一気に飲め。遠慮するな」主将がそう言う。平野もビールを一気に飲んだ。

「ところで平野」主将は平野のコップにビールを注ぎながら、問いかけた。

「お前、本当に空手、やった事ないのか？」

「はい。見た事はありますけど、やった事はありません」平野が答えると主将は「そうか。でも体力や運動神経ははず抜けているな」と言った。

「ありがとうございます」と言いながら、平野は主将のコップにビールを注いだ。

「さつき、言った様にウチの流派は独特だ。お前は見所があるから、稽古を休まず頑張れよ」と主将は言った。

平野は「はい。頑張ります」と答え、コップに入ったビールを飲み干した。

拳手法

翌日

平野は激しい腕の痛みと全身の筋肉痛に耐えながら、何とか武道場にたどり着いた。

正直、稽古する気にならなかつたが、足を運び、中を覗くと主将始め先輩達が準備体操をしていた。

「オッ、平野。よく来れたな」主将が言う。「はい」と平野は力なく答えた。

「何だ、その声は。早く空手着に着替えて来い」と先輩の一人が言った。

「はい」と言つて、平野は奥に入り空手着に着替えた。

すると、何人か、新入部員が入つて来た。

「もう、辞めようぜ」一人がそう言う。「でも、辞めさせてくれないだろう」と一人が答えた。

「全員で一斉に辞めようぜ」他の一人が言う。

「君は、どう思う？」一人が平野に聞いた。

「オレは辞める気は無い」と平野は答えた。

「じゃあ仕方ない。俺達だけで辞めるか」と一人が言う。「遅いぞ。早く着替えて出て来い」と先輩の怒鳴り声が聞こえた。

五行の拳

平野を先頭に新入部員が道場に出ると「お前達。早く並んで正坐しろ」と主将が言った。

主将は新入部員に向かつて「お前達。逃げようなんて思うなよ」と言った。

結局、稽古に参加した新入部員は昨日の半数だった。

「よし、これから稽古を始める。今日は基本からミツチリやる」と主将は言い、四股突きから稽古が始まった。

が、昨日の稽古で筋肉痛の新入部員は、まともに立てなかった。

「何だ、お前達。しっかりせい」と主将は言い、号令をかけた。

新入部員の突きはスピードが無かった。

「そんな遅い突きじゃ、相手は倒れんぞ。気合いを入れて、しっかり突け」先輩の怒号に新入部員は気合いを入れて突いたが、倒れて、座り込む者もいた。

「どうも、今年の新入部員はだらしのない奴が多いな。次は蹴り」と主将が言い、皆、前屈立ちになり、前蹴りの稽古を始めた。

またしても、バランスを失い、倒れる者もいた。

「おい。相手を倒すのに自分から倒れてどうする。倒れたいなら50回拳立てをやれ」主将が言う。すると新入部員は拳立てを始めたが10回で潰れてしまった。

平野も稽古をきついと思ったが、突きや蹴りの稽古が出来るのは楽しかった。

「よし、次は前進後退、三步手刀受けだ」主将が号令をかける。

足刀の前進後退が終わる頃、新入部員の空手着は汗で濡れ雑巾の様になっていた。

「休憩は、まだだ。次は基本の型、拳手法をやる。俺がやって見せるから覚えろ」と主将は言い、拳手法の型を始めた。

拳手法の型は、一に右の中段四股突き、二に前屈立ちで左の上段突き、三で前屈立ちになり右の裏拳打ち、四で四股立ちになり左の手刀、五で右の手刀、六で右の手刀表打ち、七で前屈立ちになり左の肘打ち、八で四股立ちになり右の肘打ち、九で左右の肘突き、十で自然体に直る。

「わかったか」主将が言う。すると新入部員は力無い

声で「はい」と言った。

「何だ、その声は三返事は」主将が怒鳴ると新入部員は「ハイっ！」と気力を振り絞り、答えた。

「では、号令をかけるから、真似して付いて来い」と主将が言い、一同、拳手法の型を始めた。

面を付けての組手

拳手法の型稽古が終わり、主将は「よし、休憩だ。と言つても次は組手をやるから、防具を付ける。今日は面も付ける」と言った。

主将に「面を付ける」と言われ、新入部員の間には嫌なムードが漂った。

しかし、平野は面を付けて顔面攻撃出来る事にワクワクしていた。

疲れ果てていたが、面を被ると主将が面金に紐を通し、結んでくれた。

「平野。お前、何か楽しそうだな」主将が言うのと平野は「はい。ありがとうございます」と答えた。

「よし、じゃあ始めるぞ。新入部員は先輩の前に立て」主将が言うのと新入部員は先輩の前に立ち、「お願いします」と言った。

主将の「始め」の声で組手稽古が始まった。

バンといきなり、面突きを食らい、ふらついた所に廻し蹴りをもらった新入部員は踞る。

胴を付けても、まともに廻し蹴りを貰いダウンする。

先輩の突きをかわしても、回転して手刀を放つ螺旋手刀を貰い、ダウンする。

「待ってないで攻撃して来い」と言われ、突きを出す、「待ってました」と言う様に螺旋手刀を貰う。

圧巻は後ろ廻し蹴りだ。

先輩が新入部員の動きを見て、顔面に後ろ廻しを放つ。

バン、と鈍い音がし、新入部員がダウンする。

平野は、そうした光景を見て、驚く。

「驚いてないで攻撃して来い。こっちから行くぞ」と先輩は言い、半飛び足刀を出して来た。

平野は何とかかわしたが続いて来た後ろ廻しを

貫つてしまった。

ガツン、という衝撃の後、キナ臭さが漂った。その後、顔面に廻し蹴りを貰った。

さらに先輩は飛び上がり逆風足刀を出して来た。

平野は持ち前の反射神経でかわしたが、連続技の飛び螺旋を顔面に食らってしまった。

隣の新人部員は先輩の二段蹴りを顎に食らい、ダウンしている。

「よし、止め」主将の声に平野は正直、「ホッ」とした気分だった。

新人部員は全員、踞つてしまった。

宗家の息子

翌日

平野が武道場に行くとき主将が声をかけた。

「今日、宗家の息子さんが指導に来て下さる。

息子さんと言つても先生だ。みつとも無い所を見

せるなよ」と言った。

平野と同じ日に入部した新人部員は四、五十人から半数に減ってしまった。

「早く空手着に着替えて全員正坐しろ」主将が言うとき新人部員は皆、急いで空手着に着替え、整列し正坐した。

「先生がいらっしゃいました」先輩の一人が言うとき主将以下、全員が体を玄関に向け、正坐した。暫くして、先輩の一人に連れられ、精悍な顔立ちの男が現れた。

主将は「全員起立。先生に礼」と言い、皆は頭を下げた。

「まあまあ、座つて下さい」と男は言い、主将に招かれ、正面に座った。

「この方は宗家の息子さんだが指導者で

外国に行つて指導もされている。先生から一言お願いします」主将が言うとき「皆さん、初めまして。私は宗家の息子で空手を普及しに招かれました。皆さん、宜しくお願いします」と先生は言った。

「では、早速、稽古を始めましょう」と先生が

言うと言将は「まず、準備体操から、させて頂きます」と言った。

待ち突き

準備体操が終わり、先生は「まず、基本から始めましょう」と言った。

主将は「正面に礼、先生に礼、お互いに礼」と言い、四股突きから稽古は始まった。

「四股立ちの腰が高いですね。もう少し、脚を曲げ腰を落として下さい」と先生は言った。

主将が号令をかけ、皆が突きを出した。

「突きを決める時、手首を返して下さい。拳はしっかり握って下さい。突いている間、腰が立って来ない様、注意して下さい」と先生が言う。

五十回突いた所で主将は「直れ」と言った。

「次は空間逆突き」と先生が言い、皆構えた。

主将が号令をかける。

先生は「突いた時、前のめりに成らない様、後

ろ足をしっかり返す様にして下さい」と言った。その後、前蹴り、足刀、前進後退を稽古し、先生は細かい点を注意した。

「よろしい。では組手をやりましょう」と先生は言い、皆、防具を付けた。

「皆、並んで正坐しろ。今日は一組ずつ、試合形式でやる」と主将は言った。

先生が審判を務め、試合を開始した。

順番が回って、平野は前に出た。

相手は、待ち突きを得意とする先輩だった。

「正面に礼。お互いに礼。始め」と先生が言う
と先輩は前腕を上げ、脇腹の攻撃を誘った。

主将の組手

（これは誘いだな）と平野は感じ、出方を待った。

「平野。待っていても相手は倒れんぞ」と先輩が言った。

五行の拳

とりあえず、平野は前足で中段前廻しを出した。先輩は蹴り足を払いながら、右顔面逆突きを出した。

バグツと言う音と共に先輩の逆突きが顔面に決まった。

「よし。技あり」と先生が言い、先輩と平野の二人は中央に戻った。

(やはり、そう来たか)と平野は思い、(では、どうするか)と平野は思った。

その瞬間、先輩の左手突きが顔面に入り、続いて、右螺旋手刀が平野の顔面を叩いた。

「よし、技あり。合わせて一本。勝ち」と先生が言った。

「考えてるとやられるゾ」と主将は平野に言った。

平野は悔しい思いの中で(果たしてどうすれば先輩に勝てるか)と反省した。

次は主将と先輩の組手が始まった。

主将は左拳で軽く顔面を狙い、回転し、中段の後ろ廻しを先輩の脇腹に入れた。

そして、左の前廻しで先輩の顔面を蹴飛ばした。

「よし、一本」と先生が言い、主将の圧勝で戦いは終わった。

全員の組手稽古が終わった後、先生は「自分は隙を作らず、相手の隙を作り、攻撃する事がポイントです。今回は、ここまでにしませう」と言った。

主将は「よし、全員、整列して正坐」と言い、「正面に礼、先生に礼、お互いに礼」と言い、今日の稽古を終えた。

「先生、今日はありがとうございました。親睦会をやるので参加して下さい」と主将は言った。

先生は「キミ、何と言う名前か?」と言い、「平野です」と答えた。

「平野君か。キミは筋が良い。主将になる器だ。頑張つて稽古して下さい」と先生は言った。

平野は「はい。頑張ります」と答えた。

一人稽古

五行の拳

その夜、平野は体の火照りで寝つけないうでいた。
(組手を上手くなるには、どうしたら良いか?)
と考えていると眼が冴えてくる。

平野は起き上がり、電灯に垂らした紐を前廻しで蹴ってみた。

すると紐が引き足に絡んだ。

(これじゃ足を掬われるな) と思い、蹴りの引き足が紐に絡まない様に蹴りの練習を続けた。

そして左拳で顔面を突き、右の螺旋手刀を出すコンビネーションの練習をした。

練習に熱中していると窓から見える空が明るくなり始めた。

結局、平野は徹夜で稽古し、朝飯を食べ、大学に向かった。

土の上で巻き藁突き

大学が夏休みに入り、拳法部の稽古は朝から行われる様になった。

部員を前に主将は「我が部は最初は土の上で稽古していた。初心に帰り、夏場の稽古は土の上でやる」と言った。

土に巻き藁が立っていた。

先輩達が巻き藁を中心に囲み、新入部員が巻き藁を突く儀式が行われた。

新入部員は拳頭が潰れ、血が出る迄、突かなければならない。

「小指、薬指の拳頭で突くな。人差し指と中指の拳頭で突け」と先輩が激を飛ばす。

突き終わると新入部員の拳頭は擦りむけ、血が滲んでいた。

胆試しの名演技

夏場の稽古で合宿が行われた。

山中、牛の糞を避けながらの稽古になった。

平野と同期、入部した一年生は8人に減っていた。

合宿では、通常の稽古だけでなく、恒例の胆試しが行われた。

3、4時間の正座後、平野は先輩からの呼び出しで階段を登っていくと待っていたのは恒例の儀式だった。

前蹴りか突きを水月で受け止める二者択一の中で平野は前蹴りを選んだ。

歯を食い縛り構えると隣で座蒲団を蹴る音がし、倒れて大声で唸る音が聞こえた。

名演技だった。

空手部なのでシゴキは覚悟してたが芝居にはビックリした。

闘わず勝利

残暑厳しい8月下旬、大学での稽古の終わり、平野が同期入部した一年生と自宅付近を歩いていると高校生二人が故意に肩をぶつけて来た。

血気盛んな平野は理不尽な行為を許せず、公園

で闘うことになった。

ところが闘う寸前、相手方仲間の一人が平野の学生服のバツチに気付き、「大学空手部だ」と大声を出して来た。

相手の二人はひれ伏し、「許して下さい」と言った。

「お前達。ケンカを売る様な事は止めて、勉強やスポーツに打ち込め。ただし、空手は止めとけ。空手はケンカの道具ではない。お前達が空手をやるとケンカの道具にしそうだからな」と平野が言う。と高校生は「はい、わかりました」と言い、逃げて行った。

「闘わず勝利、だな」と平野が言う同期生はニコリ、と頷いた。

全国大会

また、8月は恒例の全国大会が開催された。

部員全員で開催地の鹿児島に電車に乗り、向

かった。

酷暑の中、試合会場の体育館に皆、足を運ぶ。

平野達、一年生は先輩の防具を持ち運ぶ、など裏方の役割を担った。

大会では、宗家が「怪我の無いように気を付けて、闘いなさい」と強調した。

午前中は型の試合が行われ、広島修道大学拳法部の選手は、まずまずの成績を修めた。

しかし、平野の関心は、午後から始まる組手試合にあった。

「一体、ウチの大学以外の知らない選手達は、どの様に闘うだろう？」と平野は思い、組手試合の開始を待った。

結果

午後から待望の組手試合が始まった。

選手は初段から三段の黒帯で一回戦から熱戦が繰り広げられた。

選手のスピード、威力に満ちた手技、足技の応酬は平野の心を捉えた。

やがて、先輩達の試合も始まった。

平野達、一年生は先輩達を応援し、闘いに注目した。

だが、流石に全国から集まった拳士達を相手に闘いは先輩全員が全勝した訳では、なかった。

その中で主将を始め、何人かの先輩は二回戦に進出した。

重量級では主将がワンツ一の突きから前廻しで相手の顔面を蹴り、一本勝ちした。

他の先輩達も殆どが三回戦に勝ち進んだ。

平野達、一年生の応援も熱がこもった。

三回戦では主将が順当に勝ち進み、他の先輩も判定勝ちで概ね、四回戦に駒を進めた。

だが、ここまで来ると相手も猛者揃い。

判定負けする先輩も出て来た。

最後に主将が期待を担い、試合が始まった。お互い、出方を見る。

相手の半飛び足刀を先輩は裁き、足刀で応戦した。

再び、両者、睨み合う。

相手が動いた刹那、先輩の後ろ廻しがアゴを捉えた。

「技あり」審判の声で二人は中央に戻り、試合続行になった。

二人は睨み合い、相手の出方を待った。

すると突然、相手は宙を飛び逆風足刀を放った。

これが主将の胴を捉えた。

「一本。勝ち」の声で試合は終わった。

しかし、修道大は、まずまずの成績を修めた。

主将との組手

大学では後期授業が始まった。

だが拳法部の稽古は、秋の地区戦と交流試合を目標に激しさを増していた。

この時期の稽古は準備運動と基本を軽く流し、殆ど組手練習に明け暮れた。

平野達、数名は夏の合宿を終え、体力もつき、

何人かの先輩相手でも互角に闘われる様になっていた。

防具を付けると主将が「おい、平野。蹴って来てくれ」と言った。

平野は前廻し、後ろ廻し、半飛び足刀、回転後ろ蹴りなどを出したが、先輩は器用に捌く。

「蹴りの引きが甘いな」と主将は言いながら、面を付け、「顔面を攻撃して良いぞ」と言った。

平野は突きから螺旋手刀、突きから中段前廻し、二段蹴り、半飛び足刀から螺旋手刀などを出したが当たらない。

「スピードがないぞ」と主将は言い、平野に半飛び足刀を出した。

凄まじいスピードの足刀にを受け、平野は羽目板にぶっ飛んだ。

「蹴りも螺旋も受けも、まだまだだな。しかし、稽古しないと上手くならないから頑張れ」と主将は平野に言った。

平野は持ち前の負けん気で「早く上手くなるう」と思った。

学園祭

地区戦、交流試合で修道大拳法部は主将の優勝始め、ベスト4に入るなど好成績を残した。

季節は秋になり、学園祭で拳法部は試し割りを披露した。

主将は前蹴り、足刀、後ろ蹴り、後ろ廻しで四方の板を割った。

他の先輩もブロックを正拳で割ったり、瓦を割るなど空手の威力を示した。

演武の見物人達は拍手喝采した。

また、組手の紅白試合も行われ、回転系を中心とした派手な技が披露された。

夜はバーベキュー大会をするなど部員は皆、学園祭を楽しんだ。

楽しかった学園祭が終わり、木枯し吹くと次第に寒さが増して来た。

「今日から土の上で稽古を行う」と主将が言った。

厳しい寒さの中で皆、黙々と稽古に励んだ。

平野は別に寒いからツライと感ぜず、夏稽古を乗り切った自信もあり、いつも通り、稽古に熱中した。

新入部員は結局、平野始め4名残った。

この頃には、全員、飛躍的に技を身につけ、先輩との組手稽古も様になっていた。

冬休みに入ると部活動から4年の先輩が卒業し、3年生の先輩達の中から新しい主将が決まった。

送別会で平野は「お前は次期主将になるから、一層稽古に励め」と新主将から言われた。

そして、昇段試験で平野は初段になった。

初段、黒帯に

スカウト

上級生になって

二年生の春が来た。

平野達は校門で新入生をスカウトする。

新入生のスカウトは二年生の役割だ。

体格良く、根性の有りそうな新入生を中心に勧誘する。

「君、いい体してるね。何か運動してたの？」
と言った感じで新入生に話かける。

何人かは、平野達について来た。

しかし、大部分の新入生は部員にイヤそうに連れて行かれた。

道場では3年と4年生が待ち構えている。

「お前達。正座して、よろしくお願いいたしま
す、と先輩に挨拶せい」と二年生から言われ、一
年生達は正座して、「よろしくお願いいたします」
と挨拶した。

「よし、では早速、今日から稽古だ。空手着は
用意してあるから着替えろ」と主将が言うのと二年
生が道場の奥から古い空手着を持って来た。

一年生が着替えると主将は「よし、並んで整列
しろ」と言った。

主将は「正座」と言った。

一年生達は、その場で正座した。

4年生、3年生、2年生は一年生達を取り囲む
ように並んだ。

主将は一年生達の前に立ち、「お前達は実に運
が良い。我々の流派は実戦的かつ安全な稽古を
行っている。安心して修行に励むが良い。では立
て」

一年生達は立ち上がった。

主将は「正面に礼」と言った。先輩達は礼し、
一年生も、それにならった。

続いて「お互いに礼」と主将が言うのと前に並ん
だ先輩達と一年生は礼した。

「それでは稽古を始める。四股突き用意」と主
将が言うのと先輩達は四股突きの構えをした。

主将は一年生達の四股突きをチェックして回っ
た。

今年の一年生

「この四股突きは我が流派の基本中の基本だ。四股立ちで足腰を鍛練し、同時に突きの練習をする。先輩達を模範にやれ」主将は、そう言う。二年生が号令をかけた。

「皆、腰が高いぞ。突いてるうちに腰が上がって来る。気を付けろ」主将が言う。先輩達は一年生の四股突きをチェックする。

四股突きを続けているうち、一年生がふらふらになって倒れた。

「根性ない奴だな。端で見学しとれ」主将が言う。とバタバタ、一年生が倒れ始めた。

「一年生は端で先輩の稽古を見学しとれ」主将が言う。と一年生は皆、端で見学した。

先輩達は腰が低く、突きのスピードも早く、正確に水月を突いている。

50回突いて所で主将の「止め」の声がかかった。

「一年生は立て。次は右空間逆突きだ。平野、

お手本を示せ」と主将が言い、平野は一年生の前で空間逆突きをやって見せた。

「よし、一年生も付いて来い。号令に合わせて突け」と言う。と一年生は先輩の動きを見て行つた。

「よし、次は蹴りだ。前屈立ちになれ」主将がそう言う。と一年生は構えた。

先輩達は一年生の構えを細かく直す。

「では、やるぞ」と言い、主将は号令をかけた。「水が入ったバケツを持つ様、ふらつかず蹴ろ」と平野が言う。

しかし、一年生は10回も蹴れず、座り込んだ。

「どうも、今年の一年生は根性が無いな。では休憩、と言つても組手をやるから二年生は防具を持って来い」と主将が言う。と、二年生は防具を用意し、一年生に付けてやった。

一年生の組手稽古

組手稽古は面を付けず、先輩と一年生が対面し

て行われた。

半飛び足刀で羽目板まで、ぶっ飛ぶ者。

回転後ろ蹴りを脇腹に喰らい悶絶する者。

前廻しで蹴っ飛ばされる者、などがいた。

「よし、組手止め。全員整列。正座」主将が言う
うと一年生に安堵の感が流れた。

「どうも、今年の一年生は根性に欠ける様だな。

今日の稽古は、ここまでにする。一年生は掃除して着替え、校門で待ってる。歓迎会をしてやるからな」と主将が言う
と一年生は雑巾がけを始めた。掃除が終わって、奥の部屋から先輩が出ていく
と一年生の一人が「おい。このままじゃ体壊れてしまうぜ」と言った。

皆、一様に頷く。

「いっそのこと、全員で辞めちまおうぜ」と一人が言う
と平野がいきなり入って来た。

「辞めたい奴がいたら、辞めちまえ。去る者は追わん」と平野は言った。

一年生達は座り込んで「先輩、頑張ってみます」と皆、一様に言った。

「よし。それなら、これから歓迎会だ。俺につ

いて来い」と平野は言い、一年生は皆、平野について行った。

空手部からの入部

翌日、平野達、上級生が道場で準備体操をしていると、玄関から、「すみません」と言う声があった。
平野が玄関に行く
と小柄だが精悍な学生が立っていた。

「初めまして。自分は隣の空手部の二年生ですが入部させて頂きたく参上しました」と言う。

平野が「なぜ空手部を辞めてまで、ウチに入部したいのですか？」と聞くと「ウチの空手部は型中心でたまにやる自由組手も相手に当ててはダメなんですよ。強くなるには、物足りないと言いますか」と学生は答えた。

「ふむ、成る程。まあウチに来るのは構わんけど、空手部には退部届けを出したのかい」と平野は聞いた。

「はい」と学生は答えた。

「よし、では、主将に会って貰おう。入りなさい」と平野は言い、学生を道場に入れた。

「主将。入部希望者ですけど隣の空手部にいたそうです」と平野が言うと主将は「隣の空手部とウチは友好関係にある。問題なからう。入部を許す。名前は？」と聞くと学生は「石橋です」と答えた。

石橋の組手

入部した日から石橋は稽古に参加した。

しかし、少林寺流独特の稽古に慣れず、要領を得ない。

ただし、立ち方、突き、蹴りは完璧で二年生のレベルに達していた。

組手の稽古に入ると遠い間合いから突き蹴りを連発するスタイルで一年生達には圧勝した。

「よし、俺が相手をしよう」と平野は言い、石

橋に胸を貸した。

平野は石橋の突き蹴りを難なくかわし、中段に前廻しを入れた。

防具の胴を付けても衝撃が貫通し石橋は踞った。

平野は更に回転して、後ろ蹴りを石橋の脇腹に入れた。

「ううっ」と言う呻き声を発し、石橋は倒れた。「防具を付けていても、マトモに食らわない様、気を付けなさい」と平野は言った。

稽古が終わると平野は石橋を誘い、中華そば屋に行った。

二人でビールを飲んだ後、平野は石橋に「型よ組手が好きだろう」と聞いた。

石橋は「はい」と答え、「組手で全国大会に出たいです」と言った。

「君は筋が良いから、稽古を休まず、頑張ってください」と平野は言った。

全国大会への特訓

早いもので7月になると二年生以上の部員は全国大会に向けた稽古を始める。

基本、型は準備体操代わりにして組手稽古に明け暮れる。

例えば、連続組手。これは、一人で次から次へ攻撃してくる相手に連続して戦う。

いわゆる、100人組手の一種と言える。

体が守われているとはいえ、スタミナ的には防具の負荷がかかる苦しい組手だ。

主将始め大会に出場する者は、一人で次から来る相手と組手をするハードトレーニングだ。

これを続けていると普段の組手では格違いの力を発する先輩達もマトモに技を喰らう様になる。

最後は、後輩達にばこばこに遣られダウンする事になる。

汗が出尽くし、乾燥して、胴着に塩吹く状態になる。

しかし、これで地力が付き、スタミナ負けしな

くなるのだ。

トーナメント式の試合ではスタミナの有る無しが勝敗に関わって来るのだ。

こうした稽古を連日積み、修道大拳法部は今年、全国大会が開催される宮崎に向かった。

組手試合開始

宮崎に修道大拳法部が着くと旅館で一息つく。だが、夕食まで稽古が行われる。

とは言え、力とスピードをコントロールした組手稽古が主だ。

稽古を終えると皆、ひと風呂あびる。一年生は先輩の背中を洗い流す。

楽しみの夕食の時間、一年生は飯をよそい、味噌汁を入れるなど先輩の世話をする。

夕食後、一年生は先輩にマッサージしたり、干してある胴着を取り入れ、アイロンをかけたたりする。一年生は先輩の寝た後、布団に入り、眠る。

やがて、朝になり、洗顔後、皆揃って会場に行く。会場に着くと中はサウナのように蒸し暑かった。開会式では、宗家が挨拶で「皆、怪我には十分気を付け戦いなさい」と締め括った。午前中は型の試合が行われ、午後から組手試合が始まった。

修道大から組手試合に参加したのは3年、2年の10名だった。

組手試合で4回戦進出

組手試合が始まると修道大拳法部は全国の猛者を相手に善戦した。

主将は得意の後ろ廻し蹴りを相手の顔面に決めて一本勝ち。

その他、部員も概ね、優勢勝ちし、二回戦に駒を進めた。

平野は二回戦で全国大会準優勝の経験ある選手に螺旋手刀で技ありを取り、優勢勝ちを収め三回

戦に進出。

主将は大技の逆風足刀を決め三回戦に進出。

他にも4選手が三回戦に進出した。

三回戦で平野は待ち足刀で間合いを取り、螺旋手刀で技ありを取った後、左の前廻しで技あり、合わせ一本勝ちを収めた。

主将はフェイントの前廻しから、後ろ廻しに繋げ、技ありを取り、逃げ切り勝ち。

他に二選手が優勢勝ちで4回戦に進出した。

結果、修道大から4選手が4回戦に進出した。

宮崎全国大会の終わり

しかし、主将は鉄面に廻し蹴りを入れ、足指と足甲を痛めてしまった。

部員は棄権する様、説得したが、主将は闘うと言いい、試合が始まった。

相手は鹿児島総本部の選手だった。

主将は前手を上げ、中段をがら空きにした。

五行の拳

相手はフエイントを出すのが、主将は動じない。痺れを切らした相手は中段に前蹴りを出して来た。待ってました、と主将は渾身の顔面突きを入れた。

これが見事に決まり、一本勝ちを収めた。

次は平野の番だった。

平野は長いリーチを生かし間合いを取り、半飛び足刀を放った。

だが相手は100キロの巨漢で動じない。

平野は機転を効かせ、相手の手腕を標的に前廻しを出した。

相手が腕を引いた瞬間、突きを出し、螺旋手刀に繋がった。

手応えはあったが、技ありは取れなかった。

平野は相手の突きをさばき、時間切れとなった。

平野は優勢勝ちを収め準決勝に駒を進めた。

準決勝に駒を進めたのは主将と平野の二人だった。

主将は前手を上げ、攻撃を誘うパターン。

平野は足刀主体に間合いを取りながら、螺旋手

刀を入れるパターンだ。

だが、アクシデントが起きた。

平野がバランスを崩した時、相手の前廻しが胴に入り、審判が技ありを取った。

浅い蹴りだが派手な音がしたので技ありを取られたのだった。

主将も面に突きを入れても浅く技ありにはならず、判定負けした。

こうして、修道大の大会は終わった。

恋愛

いくぶん、朝夕の風が涼しくなると稽古は楽になって来る。

それでも稽古が終わると胴着は濡れ雑巾のようになる。

そんな折り、一年生の朝倉が平野に相談がある。とやって来た。

朝倉は眉目秀麗で品が良いだけでなく、根性も

あるナイスガイだった。

「どうしたんだ。朝倉」平野が聞く。

朝倉は「先輩。実は女が出来まして」と切り出した。

「それは目出たいな」と平野が言った。

「ところが空手辞めると言い出して」朝倉が言う
と平野は「うーん」と考え、口を開いた。

「自分で判断するしかないが空手を続けても良い様に説得してはどうか？それでも辞めると言うなら大した女じゃないな。と俺は思う」と平野は答えた。

「わかりました」と言い、朝倉は道場から出て行った。

平野は、その後ろ姿を見て複雑な気分になった。

交流戦

次の稽古日、朝倉は姿を見せなかった。

拳法部は、秋の交流戦を目指して、組手を中心

に稽古を続けていた。

交流戦では団体戦が行われる。

修道大拳法部では主将や平野を含め、5人が交流戦に選抜された。

交流戦は岡山の体育館で開催される。

この間、朝倉は稽古に出て来なかった。

選抜された5人は、岡山駅に着くと体育館に向かった。

晩秋に入り、清涼な風が吹いていた。

体育館に着くと拳法部の5人は主催する岡山区本部長に挨拶に行った。

試合は午後から開始された。

遠藤の勝利

試合は団体戦で5人对5人で行われる。

1回戦、修道大の相手は関西の河内地区本部だった。

まず、修道大二年生の遠藤と河内の田島が対戦

した。

田島の突きに合わせ、遠藤は後ろ廻しを出した。

それに田島は合わせ、螺旋手刀を出した。

お互い、だんご状態になり、主審が「止め」と言い、両者、中央に戻った。

主審が「始め」と言い、遠藤が二枚蹴りを中段、上段に放ち、これが田島の面に決まった。

主審は「技あり」と言い、両者中央に戻った。時間切れで遠藤が勝ちを収めた。

団体戦

次は朝倉が対戦した。

相手の攻撃を捌き、隙を付いて、朝倉は前廻しを顔面に入れた。これが技ありとなり、朝倉は優勢勝ちを収めた。

3人目は平野だった。

平野は、中段に待ち足刀を出し、間合いを取り、

相手の出方を見た。

相手のガードが下がった所、上段廻し蹴りを放ち、技ありを取った。

焦った相手に対し、面突きから螺旋手刀を放ち、技ありで合わせ、1本を取った。

修道大と関西地区本部は、共に二対二で主将対決になった。

修道大主将は、小柄だが、前手を上げ、中段攻撃を誘う。

相手は前廻しを出す。

その瞬間、前手で廻しを払い、右拳で相手の顔面を突いた。

これが見事に決まり、1本勝ちを収めた。

結局、この団体戦で修道大拳法部は岡山地区本部に勝ちを収めた。

朝倉の退部

キャンパスに木枯し吹く頃も拳法部は激しい稽

古を続けていた。

依然、朝倉は道場に姿を表さなかつた。

ある日、稽古が終わり帰途についていた平野は突然、「先輩」の声で振り向いた。

そこには、朝倉と女性が立っていた。

「稽古に来ないから心配してたぞ」と平野が言う
と朝倉は「すいません」と謝った。

「やはり、退部させて頂きます」と朝倉が言う
と「そうか。俺は来る者は拒まず、去る者は追わず、の主義だ。だが、退部届けは出せ。俺が預かる」と平野は言った。

「はい。明日にでも、お届けします」と朝倉は
言い、一礼して、女性と去って行った。

二人の後ろ姿を見て、（しょうがないな）と平野は思った。

日の出を見ながら、修道大拳法部は早朝稽古の後、巖島神社に参拝した。

その後、主将の下宿に集まり、お屠蘇を飲み、料理を食べ、皆で新年の祝賀会を行った。

4年生から1年生、合わせて20人程、集まった。

その席で平野は主将から「次の主将は、お前に決まった」と告げられた。

正月休みが終わり、大学の授業が始まると拳法部も通常稽古を行った。

大学が春休みに入っても極寒の中、拳法部の稽古は続けられ、やがて、春を迎えた。

演武会

春

桜満開の修道大校門

多くの新入生が行き交う。

その中に平野を始め、拳法部の部員達がいた。

元旦

年が明けて

五行の拳

3年生になった平野は拳法部主将になった。

平野には独自の構想があった。

それは、新入生に対し、是が非でも入部させるのではなく、少林寺流空手の魅力を伝え、アピールする事にあつた。

そして、新入生に対して、演武会のチラシを配る事にした。

演武会では型と組手を披露する。

これを一度切りではなく、何回か行う事にした。

演武会には、予想以上の見物人が新入生に限らず、集まつた。

型はアナンクー、セイサン、ワンシユウ、チントウを団体、個人で演武した。

平野は主将として、五十四歩を演武した。

平野は主将になるのと同時に二段に昇段していた。

そのため、二段で習得する五十四歩を演武したのである。

（拳法部が発展するには、やみくもに根性の切り売りの稽古をするよりも、少林寺流空手の魅力を伝える事が重要）と平野は考えていた。

無論、稽古に厳しさは必要。だが、せつかく入部してきた新入生を振るい掛ける様な無謀な稽古は問題あり、と平野は思っていた。

幸い、四年生の先輩から「主将何だから、お前に任せるよ」と言われていた。

また、演武会での組手試合は型以上に少林寺流空手の魅力を伝えるに充分だった。

面と胴と小手を付けて思い切り加撃。攻防の展開は迫力あり、見物人に多いにアピールした。

結果的に20人程の新入生が拳法部に入部したのである。

橋本

しかし、修道大拳法部の稽古は甘い物では無い。

入部して来た新入生は、やる気がある者がほとんどだったが初日からキツイ稽古が待っていた。

平野は拳立てや腹筋の回数は減らし、基本中の基本、四股突きに時間をさく事にした。

新入生の四股立ちは案の定、尻が出っ張り、腰が高かった。

「ケツを引つ込め腰が高い」二年生と三年生の櫛が飛ぶ。

休憩を入れた後、四股突きに移った。

「引手が甘い。抱きつかれた時、後ろの相手に肘打ちを入れる様に引け」と平野はポイントを指導する。

これだけで新入部員は、へトへトになった。

「よし、休憩してから空間逆突きだ。まず、先輩の動きを見学しろ」平野が言うと新入部員は正座し、先輩の行う空間逆突きを見学した。

「では、開始」と平野は言い、号令をかけた。

二、三年生の先輩の動きを見ながら、新入部員は空間逆突きを始めた。

「前屈立ちの足幅が広いな。もつと狭く」「前のめりになるな。だからといって、背を伸ばし過ぎてても、いかん」「引手が甘い」「そんな突きじゃ、相手は倒れんぞ」と平野は指摘する。

稽古開始から一時間が経ち、新入部員は疲労困憊して来た。

「よし、休憩した後、左の空間逆突きをやる」新入部員が休憩している時、二年生と三年生は防具を付け組手を始めた。

新入部員は正座して見学している。

その時、一人の新入部員が「私もやらせて下さい」と言った。

皆の視線がその新入部員に集中した。

平野が「やるのは構わんが怪我しても知らんぞ」と言うと、その部員は「覚悟の上です」と言った。

平野が「お前の名前は？」と聞くと新入部員は「橋本です」と言った。

後ろ廻し蹴り

「よし、じゃあ、二年生から杉田。相手してやれ」平野が言うと杉田は「はい」と言い、正座し面を付け直した。

橋本には、平野が面と胴と小手を付けてやった。道場中央で杉田と橋本は対峙した。平野は審判

を務め、「正面に礼。お互いに礼。始め」の声で両者の組手が始まった。

いきなり、杉田は半飛び足刀を出し、橋本は壁に吹っ飛ばされた。

「大丈夫か」の平野の声に「大丈夫です」と橋本は答えた。

橋本が前手で面突きを出すと回転した杉田の螺旋手刀が橋本の顔面に決まった。

「試合だと杉田先輩の一本勝ちになるが、まだやるか？」と平野が聞くと橋本は「やります」と言う。

中央に二人戻って、平野の「始め」の声で杉田はジリジリ、橋本に近づく。

間合いが詰まった所で橋本は後ろ廻し蹴りを出した。踵が杉田の面にかすった。

「技あり。止め」平野が言うと、両者中央に戻り、正面に礼、お互いに礼し、橋本は下がった。

平野は「橋本。どこで、そんな技習った？」と聞くと「総本部です」と橋本は答えた。

梅雨が明けて

春が去り、やがて梅雨の季節になった。

だが、季節に変わる事なく拳法部の稽古は行われていた。

今年は今のところ脱落した新入部員は一人もいなかった。

平野の方針でキツイ稽古をしてもシゴキはしなかったからだ。

新入部員は基本の四股突き、空間逆突き、前蹴り、移動稽古、少林寺流の型の基本、拳手法を稽古出来る様になっていた。

新入部員でも橋本の様に希望があれば組手もやらせた。

団体稽古が主だが、号令に合わせず一人稽古も平野は許した。その方が技の見直しに効果的だと思っただからだ。

そうしている内、梅雨が明け、全国大会のため、二、三年は、ほとんど組手稽古を繰り返す様になった。

鹿兒島入り

この年の全国大会は鹿兒島で開催された。

主将の平野を始め、修道大拳法部の部員達は広島から途中、福岡で一泊し鹿兒島に向かった。

大会の前日、鹿兒島に着き、旅館で休息した。

「明日の試合に備え、軽く稽古しよう」と平野が言い、宿の近くの公園で試合に出場するメンバーは防具を付け、組手稽古を行った。

内容は主に相手の攻撃を捌き攻撃する待ち突き、足刀、螺旋手刀など。

またフェイントからの突き、螺旋手刀、半飛び足刀、前廻し、後ろ廻しの攻撃、などで正味、一時間程で切り上げた。

その後、皆で風呂に入り、夕食を食べ、九時には就寝した。

一回戦

大会当日は晴天に恵まれた。

平野主将を始め修道大拳法部は早朝、大会会場に着いた。

会場の体育館内は蒸し風呂の様に暑かった。

宗家の開会挨拶で試合が開始された。

組手試合一回戦で二年生の早川が見事な待ち突きで一本を取った。

続いて同じく二年生の宮本が相手の出鼻を挫く後ろ廻しで技有りを取り、逃げきって優勢勝ち。

平野も得意の中段前廻しから螺旋手刀を顔面に決めた後、待ち蹴りを相手の中段に決め、合わせ一本勝ちを取った。

副将の河野が逆風足刀の大技で一本勝ちを収め、修道大拳法部は二回戦に進出した。

苦戦強いられた二回戦

しかし、二回戦。修道大拳法部は苦戦を強いられた。

四回戦

福岡県地区本部と関東連合会、北海道連合会の選手にことごとく敗戦を重ねる。

特に関東連合会の師範代の突きは鋭く、優勝候補筆頭だった。

福岡県地区本部の師範代は後ろ廻しのスピードが早く、顔面への一本勝ちを収めた。

修道大平野の出番が来た。

どうやら、修道大選手の組手を研究している様だった。

平野が対戦したのは北海道連合会の師範代。

熊の様な巨漢でジリジリ、間合いを詰めて来る。

男は、いきなり、ワンツートの突きから、平野の顔面に廻し蹴りを放った。

これが平野の面金をカスリ、審判は技ありを取った。

なお、相手はジリジリと間合いを詰めて来る。

平野はワンステップ下がり、反動を付け、相手の腕を払い、顔面に高速上段突きを放った。

これで技ありを取り、延長戦に突入。最後はスタミナで勝る平野の優勢勝ちで勝敗を期した。

三回戦、不戦勝の平野は4回戦進出。相手は鹿児島大学拳法部の磯辺靖。

昨年の大会は怪我で出場出来なかったが今大会では破竹の勢いで4回戦に進出した。

平野に取ってアクシデントが発生していた。

強烈な高速上段突きを相手に叩き込んだため、右拳が割れ、骨折していた。

この為、蹴り主体で戦う事を余儀無くされた。待ち蹴りで間合いを取り、相手の出方を待つ。

相手の前廻しを肘で叩いた。そして、直ぐ様、相手の顔面を前廻しで蹴飛ばした。

磯辺はダウン。平野は準決勝に進出した。

台湾の黄、旋風脚

準決勝で平野が対戦したのは台湾から出場した

黄。

突き蹴りバランス取れた戦いをして来た。

試合開始でいきなり旋風脚を黄は出して来た。

初めて見る蹴りに意表を付かれたが平野はかろうじてかわした。

黄は連続して旋風脚で平野を追い込んでいく。

場外になり、試合続行で平野は飛び膝蹴りを出した。黄の体が揺らいだ時、逆風足刀を黄の胴体にヒットさせ、一本勝ちを治め優勝戦に駒を進めた。

しかし、平野の右拳は骨折して割れていた。

決勝戦開始

優勝戦。

平野は拳を痛め戦いに臨む事になった。

相手は宮崎地区本部、師範代の高橋。

突き蹴りとも鋭い攻撃を展開する強敵だ。

相手の攻撃を待ち、捌いて攻撃する後の先で平

野は戦う事にした。

試合始めで両者睨み合う。

双方とも相手の出方を待つ。

高橋は腕を下げ、構えていたので、平野は蹴りが来ると読んだ。間合いは蹴りの間合いだった。

高橋が半飛び足刀を放つ。

平野は左下段払いで捌き、足刀で応戦したが、これは、届かず。

更に両者睨み会った。

勝利

高橋は左上段突きから回転後ろ蹴りを平野の中段に放った。

平野は前足を引き左手で高橋の足を払う。

そして、高橋の面に前廻しを放つ。

平野の爪先が高橋の面にかすったが浅かった。

「時間です」の声で両者中央へ。延長戦になった。

五行の拳

「始め」の声で平野は左上段突きから中段前廻し、更に右上段突きを放つ。充分な手応えがあつたが右拳に強烈な痛みが走る。

「よし。技あり」と主審の声。

中央に戻り、主審の「始め」の声とともに高橋は逆風足刀を放つ。

平野はこれをかわし、高橋の顔面に前廻しを放つ。

「よし、技あり。合わせ一本。赤の勝ち」

主審の声で修道大の仲間が平野の元に集まつて来た。

観戦していたOBも集まり、皆で平野を胴上げした。

平野は人生で一番の喜びと空手をやって良かったと感じた。

了

五行の拳

2021年1月28日発行
著者 東武瑛

説の著作権は作者にあります。作者以外による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。